第４回　続・謎の銃

皆様、いかがお過ごしでしょうか？
前回はまさかの**前置きで１回分を使い切る**という暴挙となってしまいました。
今回は反省して**ちゃんと終わらせること**を目標に頑張ります。よろしくお願いします。

―　ようやく検証スタート　―

前回の反復になりますが、右写真の銃の正体を確かめるべく、金属部品の形状から近い銃を並べて比較していきたいと思います。
（極力史料館内の写真を使用していますが、無いものはWikipediaの写真を引用しています）

今回の検証で鍵となるのが前回も触れた「弾倉（弾が収まる部分）の形状です。皆さんもその違いに注意してご覧になってください。

まず、一番可能性が高いあの国の銃から始めます！

↑銃一つにも「歴史あり」です。（写真は自衛隊の８９式小銃）

↑問題の銃。この画像が何度も出てきますので心の準備（？）をお願いします。

― 容疑者（銃）その１ ―

ガダルカナル島において日本軍が対峙したのは米海兵隊です。よってまずは米軍の小銃から比較していくことにします。

①　スプリングフィールドＭ１９０３（米）

１９０３年に制式採用された米軍の小銃です。３６年に②のM1ライフルが制式化されるまで主力小銃として使用され、その後も命中精度が高いことから狙撃銃としてベトナム戦争頃まで使用されていました。

②　M1ガーランド（米）

１９３６年に採用された小銃。当時の各国がボルトアクション式を使用する中、米国だけがいち早く半自動小銃の制式化に成功していました。１発ずつ装填動作が必要なボルトアクションとは違い、発射時に発生するガスを利用して遊底を押し戻し、次弾を装填できる画期的な構造となっています。引鉄を引くだけで撃てるというのは非常に大きなアドバンテージですね。

①

②

↑Ｍ１ガーランド。自衛隊では「M1小銃」と呼称。国賓に対する儀仗等でも最近まで使用されていました。

ガダルカナル島で使用されていたであろうアメリカ製の小銃は以上の２つです。
（小型の騎兵銃等は除く）

ここまで語っておきながらなんですが、写真を見てもわかる通り①は弾倉が無く、②はそもそもボルトアクションですらありません。

←全然違いますね。

という訳で米軍小銃の線は消えました！推理物でも一番怪しい人物は大体犯人じゃないのが常（？）です。では次にいきましょう。

－　容疑者（銃）その２－

米軍ではなかったということで、周辺にいた連合国に範囲を広げていきます。

③　リー・エンフィールド（英）

この銃は１８９５年から１９５８年という非常に長い期間、イギリスの制式小銃として改修を重ねながら使われました。そのため細かい違いを持つ銃が大量に存在し、植民地や属州など使用された地域も非常に広大です。

ガダルカナル島周辺ではオーストラリア軍やニュージーランド軍の一部がこれを使用しています。当初この銃だったのではないかと思っていたのですが、写真の弾倉部分を見てみると形状が全く異なることがわかります。

↑全然違いますね。（２回目）

－　容疑者（銃）その３－

一番期待していた③でないとすると、いよいよ手探り（手あたり次第とも言う）になっていきます。

④　モシン・ナガン（露）

ここでロシア製を持ってくる時点でツッコミを受けそうですが、史料館に実物があったのでつい。

１８９１年にロシア帝国が採用した銃で、こちらも第二次世界大戦後まで使用された銃です。史料館の展示は日露戦争の時のものです。こちらも弾倉部分が見える銃ですが、やはり形状が異なりますね。

↑全然（略）

― あらぬ方向からヒント到来 ―

今回の謎は思った以上に手強いものになりそうです。こういう時、「これは絶対ない」というところにヒントがあったりするものです。
ということで調べてみたのがこの国の小銃です。

⑤ カルカノM１９３８（伊）

ここにきて**イタリア軍**登場。ダメ元で調べてみましたが、この形状にかなりビビッときました。今までで一番近い気がしませんか？

↑似ている・・・

この時点でイタリア軍まさかの南方進出説を考えそうになりましたが、一抹の理性がそれを押しとどめました。少し形も違いますし。

― 犯人は誰だ ―

もしかして連合国より枢軸国寄りなのでは？と思わぬところ（イタリア）から手掛かりを得て、ヨーロッパ周辺を調べてみることにしました。

⑥ Gewehr1888（独）

前回（第３回）紹介した三十年式歩兵銃のモデルとなった銃です。⑤のカルカノもこちらを参考にしている銃で、よく似ていますね。この銃の派生を辿るともしかしたら正解に辿り着くのではないか、とこの時確信。そしてそれは現実となるのでした。

― 正体判明！？ ―

そして遂に見つけました。本当に意外な国から答えらしきものが出てきたのです。

⑦ マンリッヒャーM1895（墺）

墺ってどこ？となる方もいるかも知れませんが、オーストリアです。当時はオーストリア＝ハンガリー帝国であった時代で、新潟の方なら誰もが知っているレルヒさんの故国ですね。

レルヒさん

それはさておき、上図を見るとかなり近いですね！特に弾倉部分はくびれの形まで同じです。これはもう決まりではないでしょうか！？

とぬか喜びをしていたのですが、あることに気付きます。

― 謎が新たな謎を呼ぶ事態に ―

写真で見る限り限りなく近い形状なのは間違いないのですが、槓桿（こうかん）の位置がおかしい点は引っ掛かります。破損して付け直したとかかも知れませんが・・・

↑来るはずのない位置に槓桿が。変形した可能性もありますが同系統の別の銃の可能性も否定できません。

そして最大の問題は、これが本当にマンリッヒャーだったとして、なぜこの銃がガダルカナル島で見つかったのか、ということです。本当に謎です。

「**戦場とは混乱しているもの**」という言葉をどこかで読みましたが、その通りなのかも知れませんね。いつか本格的に調べてみたいと思います（了）

補足：カナダの「ロス小銃」と呼ばれる物がこの銃とよく似ており、当時ニュージーランド軍で一部使われております。しかしながら形状はこれよりさらに違うので除外しました。（Wikipedia画像もありませんでした）